

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 2 号について
平成 2 2 年度病虫害発生予報第 2 号を発表したので送付します。

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 2 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 葉いもち	並	2
	2 斑点米カメムシ類	—	2
普通期水稲	1 葉いもち	—	2
	2 スクミリンゴガイ	—	2
野菜・工芸作物全般	1 アブラムシ類	並	3
	2 ハスモンヨトウ	やや多	3
施設野菜	1 土壌病害	—	3
	2 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類	—	3
いちご(親株)	1 うどんこ病	—	4
果樹全般	1 果樹カメムシ類	やや多	4
カンキツ (露地栽培)	1 そうか病	並	4
	2 かいよう病	並	5
	3 黒点病	並	5
	4 ミカンハダニ	並	5
	5 ミカンハモグリガ	—	5
	6 アブラムシ類	やや少	5
茶	1 炭疽病	並	5
	2 輪斑病	—	6
	3 カンザワハダニ	やや少	6
	4 チャノコカクモンハマキ	並	6
	5 チャハマキ	並	6
	6 チャノホソガ	やや少	7
	7 チャノミドリヒメヨコバイ	多	8
	8 チャノキイロアザミウマ	やや少	8
	9 クワシロカイガラムシ	並	8

○ 作物の生育状況(5月中旬)

早期水稲は分けつ期、うんしゅうみかんは落弁期～果実肥大期、茶は一番茶摘採前後であった。

○ 向こう1か月の気象予報

天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期がある。気温は低い確率 40%、降水量は多い確率 40%、日照時間は平年並の確率 40%と予想されている。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台 5 月 21 日発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

早期水稻

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- (1) イネの生育は、平年より葉齢はやや遅く、分けつ数はやや少なく、草丈は低い。
- (2) 5月中旬の巡回調査では発生未確認（調査地点）であった。
- (3) 向こう1か月の天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期があり、気温は低い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 曇雨天が続く場合は、あらかじめ粒剤を水中施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- (2) 薬剤耐性菌が発生しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

2 斑点米カメムシ類

[防除上の注意]

- (1) 早期米の等級格付け低下の主因は、カメムシ被害によるものであるので必ず防除を実施する。
- (2) 米の上位等級確保のためには、液剤散布の場合では穂揃期とその7～10日後の2回防除が必要である。
- (3) 畦畔雑草はカメムシの絶好の生息域になるので、出穂期までは定期的に草刈り等管理に努める。逆に、出穂期以降は、本田への飛び込みを助長するため草刈りは実施せず、本田防除時に畦畔へも同時に薬剤散布する。
- (4) 出穂の早い、または遅い水田には集中的に飛来するおそれがあるので注意する。

普通期水稻

1 葉いもち

[防除上の注意]

- (1) 育苗期の発生に注意し、本田への持ち込みを防止する。
- (2) 育苗箱施薬は、予防的効果が高く、本田での第一次伝染と生育初期の蔓延を防止するので必ず実施する。特に長期残効型箱施薬剤は、持続効果が長く省力的である。
- (3) 向こう1か月の天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期があり、気温は低い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。
- (4) 補植用の置き苗は、葉いもちが発生しやすく、本田への伝染源になりやすいので補植が終わったら処分する。
- (5) 育苗箱施薬を実施していない場合、曇雨天が続くときはあらかじめ粒剤を施用するか、葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- (6) 薬剤耐性菌が発生しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

2 スクミリンゴガイ

[防除上の注意]

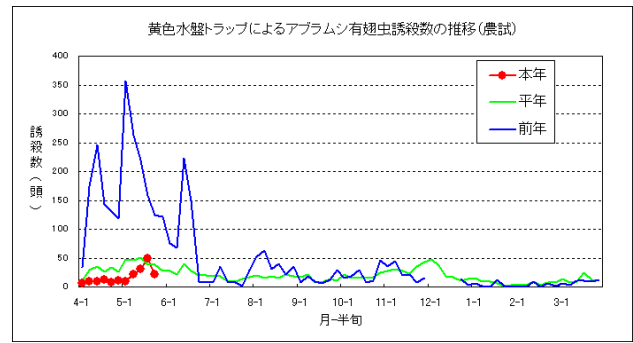
- (1) 水稻の被害は、田植え直後から3週間が著しく、その時期に深水状態ほど食害が激しいので、活着後は浅水で管理する。
- (2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。
- (3) 粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

野菜・工芸作物全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

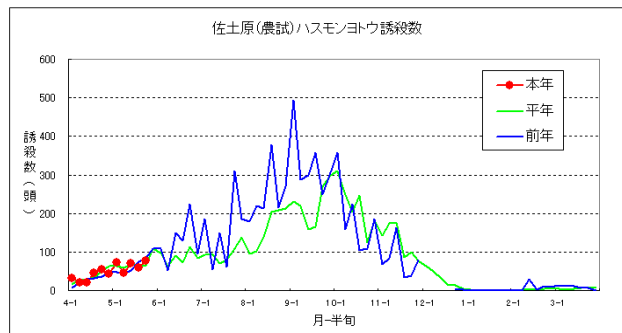
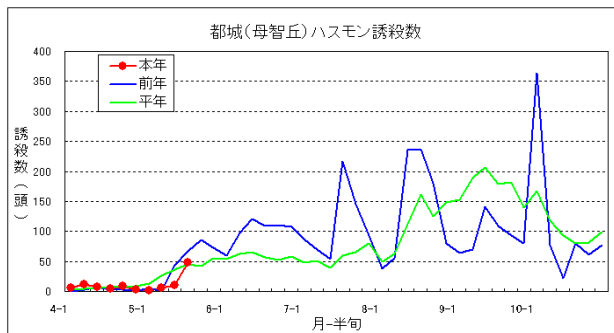
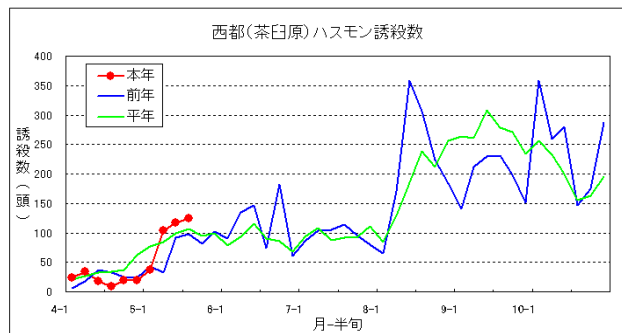
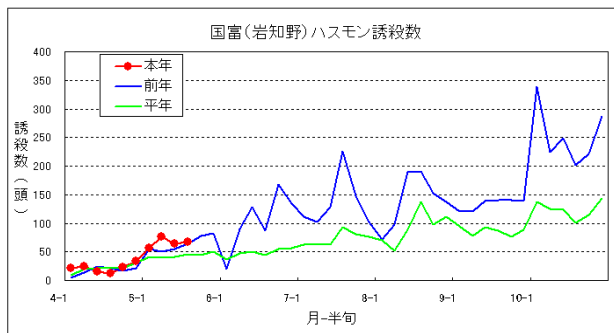
- (1) 黄色水盤トラップ(佐土原)による誘殺数は平年並の傾向で推移している。(右図参照)



2 ハスモンヨトウ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップ(西都、都城、国富、佐土原)による誘殺状況は、平年よりやや多い状況で推移している。(下図参照)



施設野菜

※平成22年度病害虫防除情報第1号及び2号(平成22年5月10日発表)参照

1 土壌病害

[防除上の注意]

- (1) 土壌病害のみられたハウスでは、土壌消毒の効果を高めるため、栽培終了後被害残さを施設外に持ち出し適切に処理する。
また、ハウス内は耕起を行って、残さの分解を早めることが重要である。

2 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類

[防除上の注意]

- (1) 近年、コナジラミ類、アザミウマ類やアブラムシ類など微小害虫によって媒介されるウイルス病(TYLCV、TSWV、CMV、MYSV、CCYV等)が問題となる事例が増加傾向にある。
(2) これらの媒介虫は、栽培終了後野外へ拡散し、地域での密度増加、さらに次期作への主な発生源となるおそれがあるので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉するなど媒介虫の死滅を図る。
(3) ほ場周辺の雑草は、各害虫の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場外に持ち出した作物残さは完全に枯死させる。

いちご(親株)

1 うどんこ病

[防除上の注意]

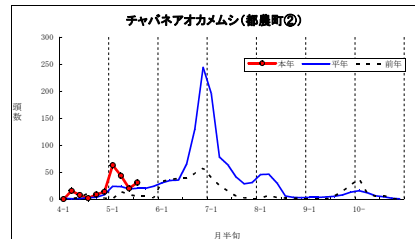
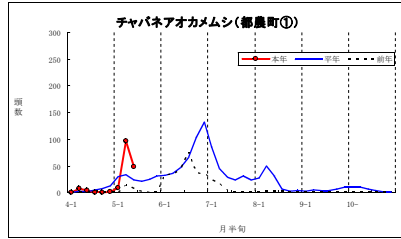
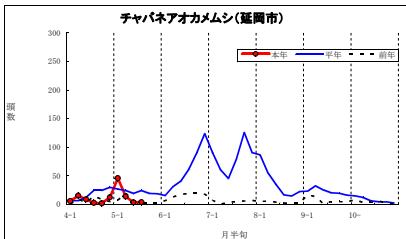
- (1) 5月中旬の巡回調査における発生面積率100% (H21:12.5%、H20:77.7%)は過去5年間で最も多く、発病葉率10.8% (H21:0.9%、H20:25.9%)は過去5年間で2番目に高く、注意が必要である。
- (2) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。
- (3) 多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- (4) 発病葉などは伝染源になるので、早めに取り除き圃場内に放置しない。

果樹全般

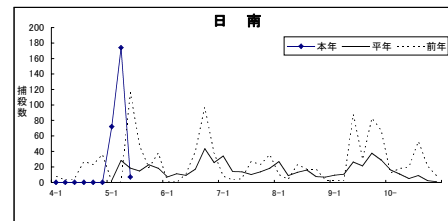
1 果樹カメムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 県内の3地点に設置したフェロモントラップ調査では、チャバネアオカメムシが平年より多い飛来状況である。(下図参照)



- (2) 県内の5地点に設置した予察灯における誘殺数は、日南の5月上旬におけるツヤアオカメムシの誘殺数が急増している。(右図参照)



[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後モモ、ナシ等は特に注意する。

カンキツ(露地栽培)

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
(平年値：発生面積率8.3%、発病葉率0.6%)
- (2) 向こう1か月の天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期があり、気温は低い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼果期である。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
(平年値：発生面積率2.5%、発病葉率0.2%)
- (2) 向こう1か月の天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期があり、気温は低い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 梅雨期に予防散布する。
- (2) ミカンハモグリガの防除に努める。

3 黒点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
- (2) 向こう1か月の天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期があり、気温は低い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼果期、梅雨期であるが、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回防除してからの積算降水量300mmを農薬散布間隔の目安として予防散布する。

4 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の発生面積率11.1% (平年17.7%) は平年よりやや少、寄生葉率0.6% (平年1.5%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30% (1葉当たり虫数0.5~1頭) を目安に防除を行う。

5 ミカンハモグリガ

[防除上の注意]

- (1) かいよう病の発生を助長するので、新梢伸長期間中は定期的に防除する。
- (2) 成虫の活動は夜間で、日中は葉裏に潜んでいるので、樹全体の防除が効果的である。

6 アブラムシ類 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の発生面積率5.6% (平年37.7%)、寄生新梢率0.3% (平年5.2%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 成木園では異常発生の場合を除いて防除の必要性はほとんどない。
- (2) 中晩柑類ではウイルス病 (CTV等) を媒介するので留意する。

茶

1 炭疽病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
(平年値：発生面積率22.3%、 m^2 当たり発病葉1.0葉)
- (2) 向こう1か月の天気は、期間の前半は数日の周期で変わり、後半はぐずつく時期があり、気温は低い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 2番茶の萌芽期に防除する。

2 輪斑病

[防除上の注意]

- (1) 病原菌は、摘採時にできた葉や茎の傷口から侵入する。摘採後、早期に薬剤散布するほど防除効果が高いので、できるだけ摘採当日に防除する。摘採後4日以降の防除では効果がない。

3 カンザワハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の発生面積率27.3% (平年50.0%) は平年より少、寄生葉率5.3% (平年4.9%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

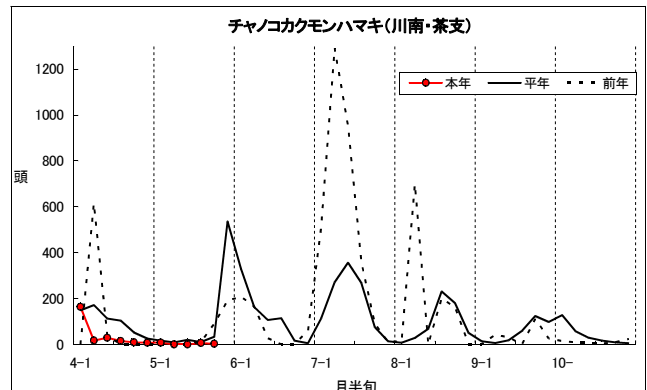
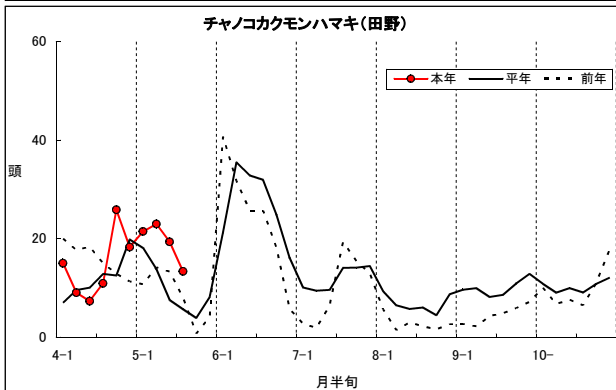
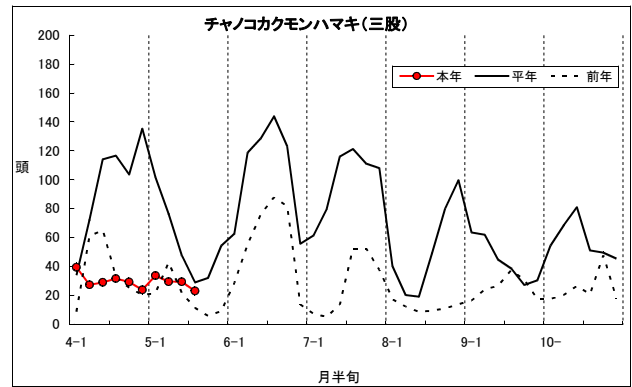
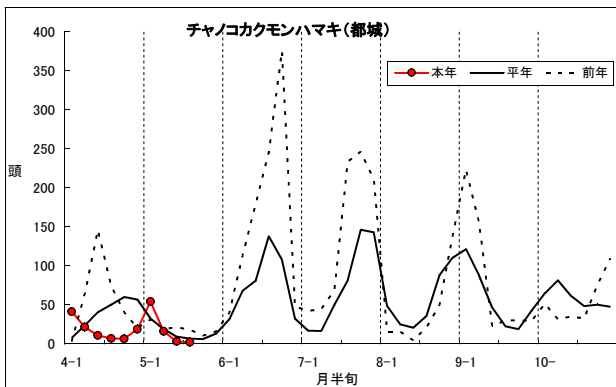
4 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値：発生面積率2.0%、 m^2 当たり巻葉数0.1葉)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査による前回の発蛾最盛期は5月上旬であり、次回の発蛾最盛期は6月下旬と考えられる。
- (2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、6月の発蛾最盛期の10日後である。



5 チャハマキ (並)

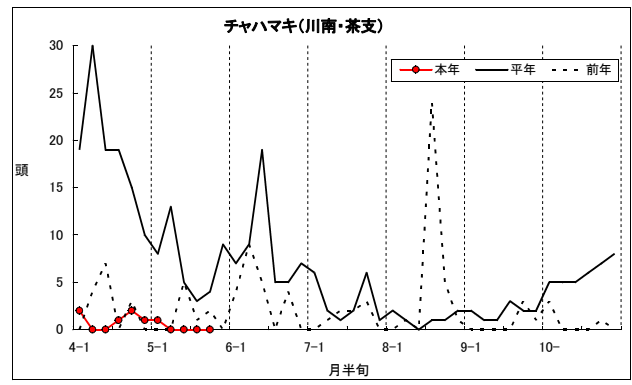
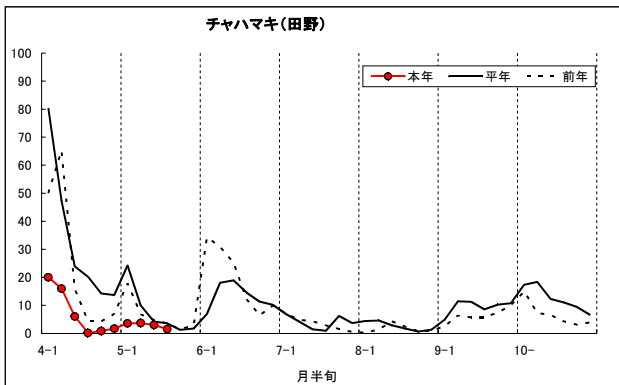
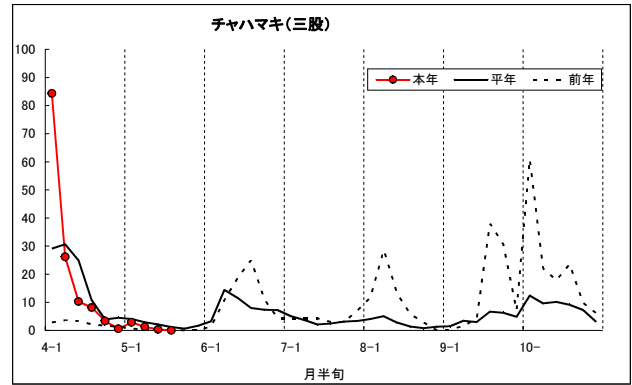
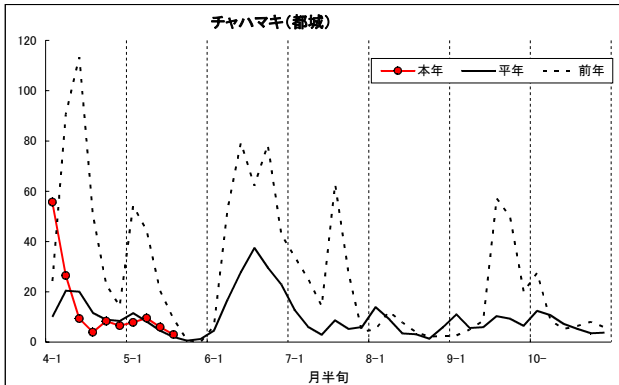
[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値：発生面積率2.8%、 m^2 当たり巻葉数0.1葉)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査による誘殺状況は、ほぼ平年並で推移している。次回の発蛾最盛期は、田野では6月上旬、都城、三股、川南(茶業支場)では6月中旬と考えられる。

(2) チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差がない場合は、チャノコカクモンハマキと同時防除が可能である。



6 チャノホソガ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。

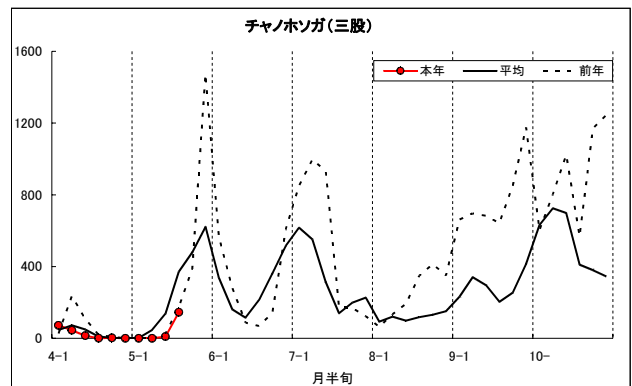
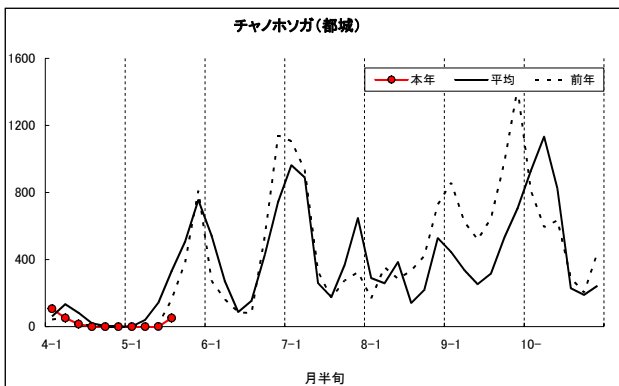
(平年値 発生面積率17.6%、m²当り巻葉数0.4葉)

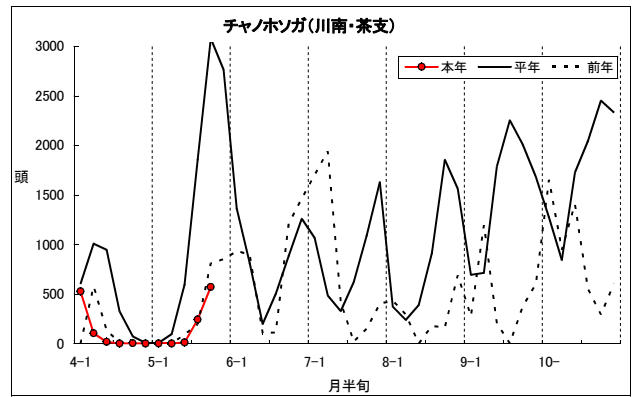
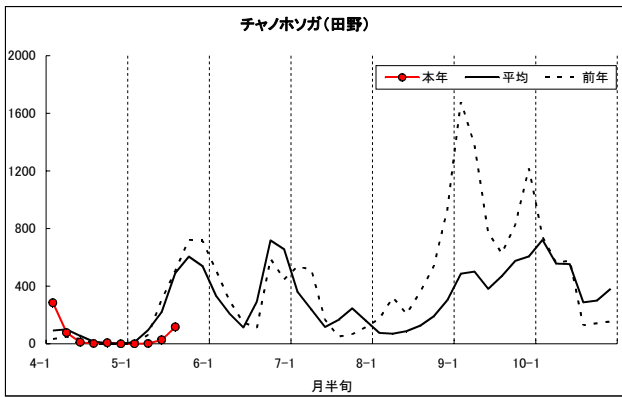
[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査での誘殺状況では、発蛾最盛期は平年よりやや遅い傾向で推移しており、次の発蛾最盛期は6月上旬と考えられる。防除適期は発蛾最盛期の約10日後である。

(2) 脱皮阻害剤は、卵期～皮下潜葉期に散布する。

(3) 一番茶芽や一番茶残葉に本虫による巻葉がみられた茶園では、二番茶芽で多発する恐れがあるので注意する。





7 チャノミドリヒメヨコバイ (多)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の払い落とし調査による発生面積率36.4% (平年16.4%) は平年よりやや多、払い落とし虫数1.7頭 (平年0.5頭) は平年より多、見取りによる寄生葉率1.3% (平年0.2%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 萌芽直後から1、2葉期を重点に防除する。

8 チャノキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の払い落とし調査による発生面積率18.2% (平年62.3%) は平年より少、払い落とし虫数3.2頭 (平年7.6頭) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 例年、2番茶期から発生が増えてくるので注意する。

9 クワシロカイガラムシ (並)

[予報の根拠]

- (1) 5月中旬の発生面積率9.1% (平年28.1%) は平年よりやや少、寄生株率1.8% (平年8.3%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は、幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期であるので、ふ化状況をよく観察し防除する。
 (2) 薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるようにいねいに行う。

○ 農薬危被害防止運動

6月1日から8月31日は、農薬危被害防止運動月間です。農薬の適正使用により、事故防止に努めましょう。

○ その他

- 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
 日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
 農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
 農林水産消費安全技術センターホームページ
 (旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
 特に水質汚濁性農薬ベンゾエピソル剤は使用しないこと。
- 発生量(程度)の区分
 多い (高い) やや多いの外側10%の度数の入る幅
 やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅

平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅
		(平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryu@pref.miyazaki.lg.jp